の他の各パビリオンにおける展示や発表も、極めて環境博の理念に忠実に、真剣にそのテーマに取り組んでいる。化石燃料を全く使わず、自然エネルギーのみで電力需要をまかなう長久手・日本館や、地熱を利用した瀬戸・日本館を始め、あらゆる場面で意欲的な試みがなされている。竹や間伐材などの自然素材を随所に使い、リデュース・リユース・リサイクルの3Rも徹底されている。圧縮天然ガス使用の大型無人隊列走行バス「IMTS」や、燃料電池バスも興味深い。

折りしも去る二月、地球温暖化防止のための京都会議議定書が発効した。京都会議の議長国をつとめたわが国としても、積極的な役割をその中で果たさなければならない。個人・市民生活・企業、一つ一つの小さな試みが、結果として地球環境の保全に向けた大きなうねりを巻き起こすことを期待したい。

地球環境に思いを寄せる契機に

一八五一年にロンドンで始まった国際博覧会は、爾来、常に時代を映す鏡であり、新たな時代のさきがけであった。国威発揚から産業技術の展覧、そして世界のかかえる問題提起と、時代と共に役割を移し、今、新世紀初頭、新たな時代の先鞭をつける日本国際博覧会「愛・地球博」が始まった。望むらくは、この開催を契機に、世界の人々の環境意識が変わる博覧会でありたいと思う。

「地球規模の諸課題解決の方向性を世界に発信し、二十一世紀の未来を予見できるものにしたい」との博覧会協会・豊田章一郎会長の言葉に、今回の博覧会の理念と祈りが象徴されている。ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんの唱える日本発の『モッタイナイ』精神に触れ、「モッタイナイという心が科学技術と結びついた時に、大きな力が発揮される」と、小泉総理も開会式で博覧会への抱負を語り、陛下からも、「人々が手を携えて地球の環境を良好に保つよう努力する契機となれば誠に喜ばしいこと」とのお言葉が述べられた。まさにそのとおりの博覧会でありたいと願う。

環境問題には、勝者も敗者もない。あるのはただ、世界全体・地球全体、人類が、そして地球上の生命がすべからく存続存在し続けられるのか。ガイアの命は保たれるかである。

二十一世紀の主役たる子供たちに、私はぜひこの博覧会を体験してほしい。かつて大阪万博で月の石に魅せられ、世界を初めて体感したように、子供たちにと

記念植樹をする筆者（瀬戸会場、記念モニュメント前にて）

ってこの博覧会は、新たな時代の予感となり、また世界との出会いである。地球環境の危機感を共有し、環境共生にむけての種々の意欲的な取り組みを目にし、また世界のさまざまな国と価値観に触れる中で、二十一世紀を生きる子供たちはそこから何を感じ取るのであろうか。真の地球市民意識と環境共生の理念の芽生えを望みたい。

博覧会は、何人が訪れたかより、そこで何が生まれたのかが重要である。規模の博覧会は終焉し、価値の博覧会に転換させていくことが必要であろう。意識と技術の進化によって、地球温暖化をはじめとする諸課題に、今こそすべてのレベルで取り組まなければならない。愛・地球博の開催を通じて、世界各国からのすべての参加者が心一つに地球環境に思いを寄せ、かけがいのない地球を、そこに住む運命共同体たる地球市民として守っていく意識が芽生えることを期待する。

三月二十五日の博覧会初日、会場一体は、時ならぬ冷え込みに一時雪が舞ったが、春の訪れはもう近い。長久手・瀬戸、両会場で展開される「愛・地球博」が、人々の心に文字通り「自然の叡智」をもたらす契機となることを、開催を支える地元市民の一人として、心より願ってやまない。